

『夢にも思いませんでした』

しま まなぶ

「目が合っただけで絡んできたチンピラがいましてね、正拳突き一撃で伸ばしてやりましたよ」

本当は空手なんて習っていなかった。

「叔母はまるで息子みたいに可愛がってくれました、ううう……。休暇、いただきます」

母は一人っ子だ。存在しない叔母が死ぬはずもない。

「病気で亡くなった彼女のことを忘れられないんです……。だからまだ結婚は……」

結婚どころか彼女いない歴イコール年齢だった。

「夢を見ていて、ああ、これは夢だって分かること良くあるよ。怖い夢を見ていても、これ夢じゃんて分ければ、よし目を覚ますぞって、起きれるし」

これは本当だった。嘘みたいだけど。

その男はとにかく良く嘘をついた。それでも会社でそこその信頼を得て仕事をしていたら、嘘のつき方がとても上手だったからだ。嘘を円滑なコミュニケーションのための潤滑油ぐらいにしか思っていなかったから、男はデータラメな創作をよどみなく話し、信じさせる事が出来たのだ。これは特技と言って良いだろう。

その日、寝坊して会社に遅刻した男はこんな嘘をついた。

「いやー、たいへんでした。今朝、家を出て駅に向かう最初の横断歩道で、おばあちゃんが派手に転びましてね」

男が言うには、信号が青に変わり横断歩道を渡り始めると、一人のおばあちゃんが目の前でつまずき倒れ、顔面を打ってしまったから、介助して救急車を呼び、ご家族の方にも電話をし、救急車が到着するまで付き添っていたのだと。男の話しぶりに職場の面々は皆感心し、男は遅刻を咎められることもなかったのだ。

そしてその晩男はこんな夢を見た。

男は横断歩道を前に信号が変るのを待っていた。青に変わり、通勤、通学のたくさんの人たちが進み始めると、目の前で一人のおばあちゃんが前のめりに倒れた。

「だいじょうぶですか！」

男が歩み寄ると、他にも二人の女性が手を貸してくれて、一先ずおばあちゃんを抱き起こし、近くのベンチに座らせた。おばあちゃんは額から血を流している。男は血を見るのが苦手だったから、すぐにそこから離れたくて、二人の女性にこんな嘘をついた。

「あの、申し訳ありません。私、これから社運をかけた大事な商談があるのです。急がなければフライトに間に合いません。後をお願いしても宜しいでしょうか」

二人の女性は、どうぞどうぞ、と言う。男は急ぎ足でその場を去り横断歩道を渡ったところで振り返ってみた。すると不思議なことに、おばあちゃんに付き添っていた二人の女性の姿がなく、そればかりか通勤通学の人波もぱったりとなくなって、おばあちゃんがたった一人ベンチに座り、血まみれの顔を男に向けているのだった。

「ひいひい」

男はぞつとして、おばあちゃんに背を向け必死に駆けた。そこでふと気がつく。

「なんだ：：これ、夢じゃん」

夢なら目を覚ませばよい、と、男は目を開けた。

目を覚ますと、時刻はもう8時半を過ぎていた。やばい、遅刻する！と男は急いで着替えて家をでた。すると携帯電話に着信があった。営業課長からだ。男は走りながら電話に出た。

「はい、清宮です」

「おい清宮、いまだここに居るんだ」

「あ、はい、会社に向かっているところですよ」

「は？なんで会社なんだ！ちがうだろ！早く羽田に來い羽田にい！タクシー使え！」

「え？？あ、は、はい！急いで向かいます」

なぜ羽田に？男は訳が分からぬまま羽田空港へ駆けつけ、課長と合流して急いで福岡行きに搭乗した。機内で説明されたことには、本来課長と一緒に行くはずだった高橋氏が病気で来られなくなったから、急遽代理で自分が行くことになったのだそうだ。

「到着までにこれに目を通しておいて。それから、キミの人当たりの良さを買っ

て今回抜擢したんだからな、キミはとにかく、先方にうまく話を合わせてくれ。社運をかけた大事な商談だから、しっかり頼むよ」

「あ、はい、わかりました」

（あれ？社運をかけた大事な商談・・・おれが夢で言ったやつ・・・）

福岡に到着し、目的の会社へ出向くと、二人は社長室へ案内された。そこで出迎えたのは茶色の柴犬だった。ワンワンと吠えたかと思うと犬は男の周りをグルグルと駆け回り、遊んでくれとばかりに丸い瞳で男を見上げ、尻尾をぶんぶんと振った。

「いやーどうもすみません。トラ、こっちに来なさい、トラ！」

社長が声を掛けると柴犬は社長の元へ戻っていく。

「すみません、さあ、こちらへおかけ下さい、どうぞ」

二人が来客用のソファーに腰掛け丁寧に挨拶しているところへ、さっきの柴犬がまたやってきて男の膝に前脚をかけた。社長が言う。

「うちのトラは清宮さんが好きらしいですね」

「うれしいです、ふふふ。かわいいですねえトラ君」

男がそう言って犬の頭をなでると、犬は男の顔をべろべろと舐めた。

「こらこらやめなさいトラ！こっちに来なさい！」

「いやあ、いいんですいいんです。わたし犬は大好きですから」

「そうですか、清宮さんは犬派ですか」

「はい、そうなんです。わたし、実家が埼玉県なんですけど、そっちに犬好きの叔父がおりまして、7匹ぐらい犬を飼っているんですよ。いや、9匹ですね、またもらってきたんだった」

「多頭飼いですか」

「そうなんです。捨て犬だったり、事情があって飼えなくなったワンちゃんを引き取ったりして増えちゃったんですよ」

「へえ、叔父さんえらいですねえ。でもお世話するのも大変でしょう」

「はい、ですから時々わたしも遊びに行つて、掃除したりご飯あげたり散歩させたりして面倒みているんです」

「それはそれは、叔父さんも清宮さんも犬愛に溢れていますね」

「そうですね、あははは」

そんな会話で盛り上がると、先方の社長は大変に機嫌もよく、その調子で仕事の話の方もとても上手くまとまったのだった。

そして帰り際に社長が言う。

「清宮さん、こういうのいかがですか。良かったら差し上げます」

「わあ！これ、ネットで見たことあります。ワンちゃんを車に乗せる時の！」
「そうです。ベルトの片側をハーネスに取り付けて、もう一方をシートベルトの受け側にカチヤンと嵌めるんです。わたしも使ってみました。車内をあちこち行かないし、窓から飛び出す心配もないですよ」

「欲しいと思っていました、わあく。これ、しかもヴェイトンとコラボしたヤツじゃないですか！こんな高級な物を、本当にいただいても宜しいのですか」

「もちろんです。犬を愛する方にぜひ使っていただきたい。3本在りますからどうぞ。」

「3本も！ありがとうございます。3匹一度に車に乗せて、ドッグランとか連れて行けます。夢みたいです。夢なら覚めないでほしいです。」

男は自分でもちよっと大げさだと思ったが、調子に乗った舌はますます滑らかだった。社長は満面の笑顔で二人を見送った。

そして帰り道、男は課長に随分褒められた。

「しかし清宮君、キミがそんなに大好きだったとはなあ。大好きな社長に合せてキミを選んだ訳ではなかったんだが、結果大正解だったよ」

「あ、ありがとうございます。バタバタしましたが、フライトに間に合って良かったです」

「ほんとうになあ、わははは」

男は本当は大好きではなかったし、叔父さんの話も全部デタラメだったけれど、取引先の社長が喜び、仕事も上手く行ったのだからと鼻歌気分だった。

そしてその晩、男はまた夢を見た。男はどこかのボロい一軒家のなかで複数の犬に囲まれてたはずんでいた。犬たちがワンワンと吠え、バタバタ走り回ったり取っ組み合ったりと騒々しい。そしてろくに掃除もしていないのか酷い臭いがした。

薄暗い家の奥から、痩せこけた暗い顔をした男がぬっと現われて言う。

「おい、久しぶりだな。しばらく来なかったじゃないか」

「だ、だれですか？」

「おい、だれだとは随分だな。おまえ、おれの顔を忘れたのか。仕事先で自慢げに話していたじゃないか。大好きな叔父が居て、自分も大好きな犬たちを可愛がってるって」

「え、なんでそれを知っているんだ」

「なんでだど？それはお前が話した通りで、おれがお前の叔父だからだろう。おれは、お前の、埼玉の実家の方に居る、大好きで病気の叔父さんだよ」

「え？叔父さんて、あの叔父さんなのか・・・」

男は混乱しながらも徐々に考えを整理していった。

「あ！これってもしかして夢？そうだそうだ、夢じゃんこれ！」

男はこれが夢だと理解した。そして、昨日のおばあちゃんのこと、この叔父さんのこともそうだが、現実世界でついた嘘が夢の世界に現われ、夢の中でついた嘘が現実世界に出現していると言うことに気がついた。

「なんだ、そういうことが起こっていたのか」

男は良い事を思いついた。

「叔父さん、犬たちの世話だけど、人を雇ったらどうか。家も直してさ、ちょっと広くしたらいいよ」

「そんなこと、金がかかるじゃないか」

「大丈夫、オレが出すから。実はオレ、宝くじが当たったんだ、1等前後賞合わせて6億円」

叔父さんは、それを信じたのか嘘だと思ったのか分からないが、そのまま表情も固まって動かなくなった。

「叔父さん、とりあえずドッグフードが切れてるみたいだから、買ってくるね」

男はそう言つて、騒音と悪臭の部屋から逃げ出した。

宝くじが当たったと夢の中で嘘をついたのだから、あとは目を覚ますだけでいきなり大金持ちだ。意気揚々と歩きながら、男はさあ起きようと思った。が、どういう訳か一向に目が覚めない。

「あれ？どうしたら良いんだっけ……。これ、まだ夢の中だよな……」

男が戸惑いながら道を進むと見慣れた交差点の前に出た。赤信号で立ち止まると、男は急に足首をつかまれた。びっくりして下を向くと、おばあさんがうつぶせに倒れていて、男の足首をガツチリとつかんでいる。男は反射的に足を引こうと思ったが金縛りに遭ったように身体が動かない。そしてゆっくりと顔を上げたおばあさんの顔は血まみれだった。

「ひいひいっ」

逃げようにも男はまだ身体が動かない。おばあさんがゆっくりと言う。

「救急車を呼んでくれるんでしょ、家の人に連絡してくれるんでしょ、手当てをして付き添ってくれるんでしょ」

「う、う、う、うわあああゝ！！」

男が声を上げると、その声を聞きつけたように道の向こうから犬たちが駆けってくる。1匹、2匹、3匹……全部で9匹か。「散歩させといてくれよー！」と叔父さんの怒鳴り声が響く。そして気がつけば数え切れないほど沢山の男は取り囲まれていた。どれもどこか見覚えのある顔だった。睨みをきかせてくるのは正拳突きで伸ばしたチンピラ。青白い顔でフラフラとしているのは重病で亡くなった叔母。かつて付き合った薄命の美女、等々……。それらは皆いつか男が

デマカセに作り上げた嘘の人物たちだった。全員が男に向かって罵り非難の言葉を浴びせている。

男はぶるぶると震えだした。相変わらず目は覚めない。助けを求めるように遠くへ目をやると周囲に闇が迫ってくるのが見えた。あの闇に飲み込まれたら全てが終わってしまう気がして男は焦った。

「目を覚ませ、目を覚ませ、め、を、さ、ま、せええ！」

大声で叫びながら、男は福岡で言った一つの嘘を思い出した。

《…夢なら覚めないで欲しい…》

「あ、あああ！…いや、ちがうんだ、ちがうんだよ！！あれは嘘、嘘なんだよ！！嘘なんだよ！！！」

男は本当のことを叫びながら絶望していた。まだ目は覚めない。闇はもうすぐそこまで迫っている。